

「良妻ぶる」妻は「悪妻」か

——接尾辞「ぶる」付加による価値評価の転換と収束

玉 岡 賀津雄
宮 岡 弥 生
黄 其 正

「良妻ぶる」妻は「悪妻」か

— 接尾辞「ぶる」付加による価値評価の転換と収束

玉 岡 賀津雄
宮 岡 弥 生
黄 其 正

要 旨

接尾辞「ぶる」を単語に付加した場合に、単語の価値評価がどう変化するかを質問紙法により調査した。その結果、「良妻」のようなプラス価値語に「ぶる」を付加すると、マイナス評価へと価値転換が起こった。しかし、その値は若干マイナスであり、中間的な評価であった。同様に、マイナス価値語の「悪妻」に「ぶる」を付加しても、あるいは「学生」や「既婚者」などの中間的な価値の単語に「ぶる」を付加しても、その価値評価は中間的な値となった。しかし、「彼女は悪妻なのに良妻ぶっている。」として基準を設定すると、プラスからマイナスへの大きな価値転換が起こった。この逆の「彼女は良妻なのに悪妻ぶっている。」とすると、基準が無い場合と同様に、中間的な価値へと収束した。以上の結果は、20歳前後の若い世代と30歳から40歳代の年長の世代で、大きくは変らなかった。

【キーワード】 接辞, 「ぶる」付加, 単語の価値評価, 価値転換, 収束

1. はじめに

接尾辞「ぶる」は、名詞や形容詞語幹などにつき、そのようにふるまう、そのふりをよそおうの意を表す(日本大辞典刊行会, 1981)と言われている。用例としては、「学者ぶる」、「えらぶる」などがある。森田(1989)は、接尾辞「ぶる」を、「プラス価値を持つ体言につき、気取っていかにもそうであるかのように振る舞う状態を批判する語なので、マイナス評価となる。」(p. 355)と説明している。また、森田(1996)は、接尾辞「ぶる」が、「誇大な振る舞いを快からず眺める話者の評価意識の現れた言葉である。」(p. 185)と述べている。森田(1989, 1996)の例としては、プラス価値の単語である「聖人」、「学者」、「高尚」に「ぶる」を付加した「聖人ぶる」、「学者ぶる」、「高尚ぶる」がある。「聖人ぶる」は、裏では悪いことをもしている俗人が表面的に聖人のふりをしているという意味で用いられる。「学者ぶる」は、学者ではない人が学者であるかのように知識をひけらかすこと、「高尚ぶる」は、低俗な人が高尚なふりをすることである。つまり、「ぶる」は、単語の価値評価を、プラスからマイナスへと転換させる機能をもっているとしている。

これに対して、国立国語研究所(1985)の例では「兄貴ぶる」や「ハイカラぶる」などが挙げられているが、「兄貴」や「ハイカラ」が、「聖人」や「高尚」のようにプラス価値を持つ単語であるかどうかは判断しがたいところである。同様に、黄(2001)も、「たいした

仕事もしていないのに今さら母親ぶって、……」(『赤ちゃんが来た』p. 48)を引用して、「母親」の役割のプラス価値の側面を捉えて「母親ぶる」という表現が成り立っていると説明している。これは、基本的には森田の主張するプラス価値からマイナス価値への「転換機能」である。しかし、「母親」をプラス価値語として解釈するのも難しいであろう。そこで、毎日新聞の1991年から1999年までの記事から「ぶる」付加語を検索してみた。その結果、「英雄ぶる」、「武者ぶる」、「良い子ぶる」、「老成ぶる」、「政策通ぶる」、「大物ぶる」、「正義派ぶる」などプラス評価の単語と思われるものの他に、「大人ぶる」、「女優ぶる」、「研究者ぶる」など、どちらかと言えば中立的な価値の単語に付く例も見られた。また、「被害者ぶる」では、「被害者」をプラス価値とみなすのは難しいであろう。さらに、松竹株式会社制作の『男はつらいよ・寅次郎夢枕』(山田洋次)では、「幸せのかたまりみたいな面しやがって、不幸せぶるなって言ってんだよ。」と、「幸せ」に対するマイナス評価語の「不幸せ」に「ぶる」が付けられている。つまり、マイナス評価語に「ぶる」が付加されることもある。

ここで「良妻」と「悪妻」の例で考えると、「良妻」ではない人が「良妻」のふりをすることもできるように、「悪妻」ではない人が何らかの理由で「悪妻」のふりをすることも考えられる。この場合、マイナス評価語の「悪妻」に「ぶる」がついた「悪妻ぶる」という表現も、誤りとはいえない。これは、「ぶる」の本来の意味が「そのようにふるまう、そのふりをよそおう」ことにあるためであり、もともとの単語の価値評価がマイナスかプラスかということに拘わりなく、さまざまな価値評価の語彙に付加しうることを意味しているのではなかろうか。

ここで、接尾辞「ぶる」の価値転換について考えてみる。森田(1996)および黄(2001)に則して考えると、プラス価値語の「良妻」は、「ぶる」を付けるとマイナス価値語の「良妻ぶる」へと価値転換する。ならば、仮にマイナス価値語である「悪妻」に「ぶる」を付加すると、プラス価値へと転換して「良妻」となるのであろうか。つまり、「良妻ぶる」妻はマイナス価値語の「悪妻」と同じ価値評価になり、「悪妻ぶる」妻はプラス価値語の「良妻」となりうるのであろうか。さらに、中立的な価値の単語である「学生」、「庶民」、「既婚者」などに「ぶる」が付加されるとどうなるのであろうか。本研究では、「ぶる」付加による単語の価値評価の転換規則を検討するために、日本語母語話者を対象に調査を2つ行った。第1の調査は、「彼女は良妻ぶっている。」と表現された「彼女」の価値を評価するというものである。調査2では、「彼女は悪妻なのに、良妻ぶっている。」と、「彼女」の基準を明示して、同様の価値評価を被験者に行ってもらった。また、世代の違いによる差異を検討するために、20歳前後の世代と、30歳代から40歳代の世代について調査を実施した。

2. 調査1－基準を設定しないで「ぶる」を付加した場合の価値評価の測定

被験者 世代の異なる2つのグループから143名の被験者を選んだ。若い世代は、日本語を母語とする大学生86名(女性15名, 男性71名)で、彼らの平均年齢は、19歳8カ月(標準偏差が1年4カ月)であった。最も若い学生が17歳9カ月で最も年齢の高い学生が22歳5カ月である。また、年長の世代は、30歳代から40歳代の57名(女性29名, 男性28名)であ

る。彼らの平均年齢は、36歳1カ月(標準偏差が4歳9カ月)であった。最も若い者が30歳2カ月で、最も年齢が高い者が44歳8カ月であった。

質問紙 接尾辞「ぶる」付加の有無による価値評価の違いを測定するために、「彼女は良妻である。」と表現した場合の彼女に対する印象と、「彼女は良妻ぶっている。」と表現した場合の彼女の印象とを、「とても良い」の+3、「よい」の+2、「やや良い」の+1、「普通」の0、「やや悪い」の-1、「悪い」の-2そして「とても悪い」の-3までの7つの連続尺度で被験者に質問紙で評定してもらった。

刺激語 採用した単語は、プラス・中立・マイナスの意味をもつものそれぞれ10語ずつで(合計30語、うち10組の20語は意味的に反対の語)、上記の2種類の文章に埋め込んで(合計60文)、ランダムに配列した。プラスの意味の単語とマイナスの意味の単語については「悪妻」のように、両者が反意語となるようにした。

3. 調査1の分析と結果

刺激語を埋め込んだ60文について、143名の日本語母語話者(若い世代が86名、年長の世代が57名)が価値評価を行った。若い世代と年長の世代のそれぞれにつき、接尾辞「ぶる」付加の有無による価値評価の違いを、2(若い世代と年長世代)×3(単語の価値:プラス・中立・マイナス)×2(「ぶる」付加の有無)による分散分析で検討した。反復測定の変数は、「ぶる」を付加していない単語の価値評価と付加した場合の価値評価である。分析は、被験者についてではなく、刺激項目である単語についておこなっている。各単語の平均は表1に、また条件ごとの平均は図1に示した。

分析の結果、「ぶる」付加の有無 [$F(1,54)=296.83, p<.0001$] およびプラス・中立・マイナスの単語の価値 [$F(2,54)=141.17, p<.0001$] に有意な主効果がみられた。しかし、世代 [$F(1,27)=0.28, n.s.$] には主効果がみられず、20歳前後および30歳から40歳代の2つの世代で、価値評価に違いはなかった。以上の3つの変数で交互作用が有意であったのは、「ぶる」付加の有無と単語の価値のみであった [$F(2,54)=269.16, p<.0001$]。つまり、単語がもともと持っているプラス・中立・マイナスの価値の違いによって、「ぶる」を付けた場合の価値評価の転換の仕方が異なっていることを示している。この結果を、図1の平均から考えると、いずれの世代でも、「ぶる」を付加することでプラス価値語が正から負の方向へと価値評価が大きく振れて、ややマイナス評価となっていることが分かる。また、マイナス価値語についても、いずれの世代でも負から正の方向へ若干振れて、ややマイナスの価値評価に落ち着いている。さらに、中立価値語も揺れ幅は小さいものの正から負の方向へ振れ、やはり若干マイナスの価値評価となっている。

以上の結果のうち最も興味深いのは、次の2点である。1つは、プラス・中立・マイナス価値語が、「ぶる」付加によってそれぞれ異なる振れ値(表1の注2,注3を参照)を示していることである。表1の振れ値の平均をみると分かるように、プラス価値語の振れ値は、若い世代で-2.41、年長の世代でも同じような振れ値で-2.64である。中立価値語は、若い世代で-1.16、年長の世代で-0.79である。一方、マイナス価値語については、振れ値が小さく、若い世代が0.65で、年長の世代が0.61である。つまり、「ぶる」の付加は、「正直者」のようにもともとの単語がプラスの価値である場合に、もっとも大きく負の方

表1 「ぶる」付加の有無による価値評価と振れ値

刺激語	「ぶる」の有無 (20歳前後, n=86)			「ぶる」の有無 (30から40歳代, n=57)		
	無し	有り	振れ値	無し	有り	振れ値
プラス価値語(n=10)						
正直者	2.11	-1.21	-3.32	2.04	-1.07	-3.11
善人	1.94	-1.04	-2.98	1.95	-1.05	-3.00
良妻	1.84	-0.94	-2.78	1.88	-0.88	-2.75
優等生	1.46	-1.14	-2.60	1.35	-0.96	-2.32
有能	1.55	-0.92	-2.47	1.74	-0.98	-2.72
利口	1.33	-1.07	-2.40	1.28	-1.05	-2.33
まじめ	1.65	-0.65	-2.29	1.74	-0.72	-2.46
上品	1.28	-0.75	-2.04	1.74	-0.82	-2.56
謙虚	1.60	-0.28	-1.88	1.77	-0.70	-2.47
人格者	0.54	-0.85	-1.39	1.70	-0.98	-2.68
平均	1.53	-0.88	-2.41	1.72	-0.92	-2.64
標準偏差	0.43	0.27	0.56	0.24	0.14	0.27
中立価値語(n=10)						
大人	1.24	-0.24	-1.47	1.21	-0.39	-1.60
独身	0.47	-0.91	-1.38	0.11	-0.77	-0.88
政治家	0.16	-1.16	-1.33	0.16	-0.79	-0.95
社会人	0.68	-0.60	-1.28	0.33	-0.39	-0.72
若者	0.91	-0.32	-1.22	0.47	-0.09	-0.56
庶民	0.84	-0.38	-1.21	0.44	-0.39	-0.82
学生	0.67	-0.47	-1.14	0.14	-0.51	-0.65
既婚者	-0.01	-0.96	-0.95	0.11	-0.67	-0.77
子ども	0.48	-0.34	-0.82	-0.30	-0.65	-0.35
年寄り	0.18	-0.58	-0.75	0.18	-0.46	-0.63
平均	0.56	-0.60	-1.16	0.28	-0.51	-0.79
標準偏差	0.38	0.31	0.24	0.39	0.22	0.33
マイナス価値語(n=10)						
劣等生	-0.52	-0.47	0.05	-0.70	-0.72	-0.02
無能	-0.65	-0.58	0.07	-0.88	-0.77	0.11
愚か	-0.79	-0.58	0.21	-1.09	-0.72	0.37
変人	-0.86	-0.54	0.32	-0.82	-0.84	-0.02
下品	-1.55	-1.12	0.44	-1.44	-0.96	0.47
傲慢	-1.33	-0.69	0.64	-1.56	-0.89	0.67
不真面目	-1.42	-0.58	0.85	-1.67	-0.77	0.89
悪妻	-1.94	-0.87	1.07	-1.58	-0.60	0.98
うそつき	-1.96	-0.73	1.24	-2.00	-0.95	1.05
悪人	-2.00	-0.39	1.61	-2.00	-0.39	1.61
平均	-1.30	-0.65	0.65	-1.37	-0.76	0.61
標準偏差	0.57	0.21	0.53	0.48	0.17	0.53

注1：価値評価は、+3から-3の変数である。

注2：振れ値は、「ぶる」付加無しの価値評価から「ぶる」付加有りの価値評価を引いた数値である。

注3：振れ値が正の場合は、価値評価が肯定的に振れたことを意味し、負の場合は否定的に振れたことを意味する。

向に振れる。また、「うそつき」のようにもともとの単語がマイナス価値の場合には、正の方向に対して振れるが、その振れ値は極めて小さい。この点で、森田(1989, 1996)の、プラス価値語に「ぶる」がつき正から負へと振れるとする説明は正しいと言えよう。しかし、本調査1では、さらに中立価値語も正から負への振れがみられ、マイナス価値語では、逆に負から正へと振れるが、その振れ値は予想に反して極めて小さいことを実証した。

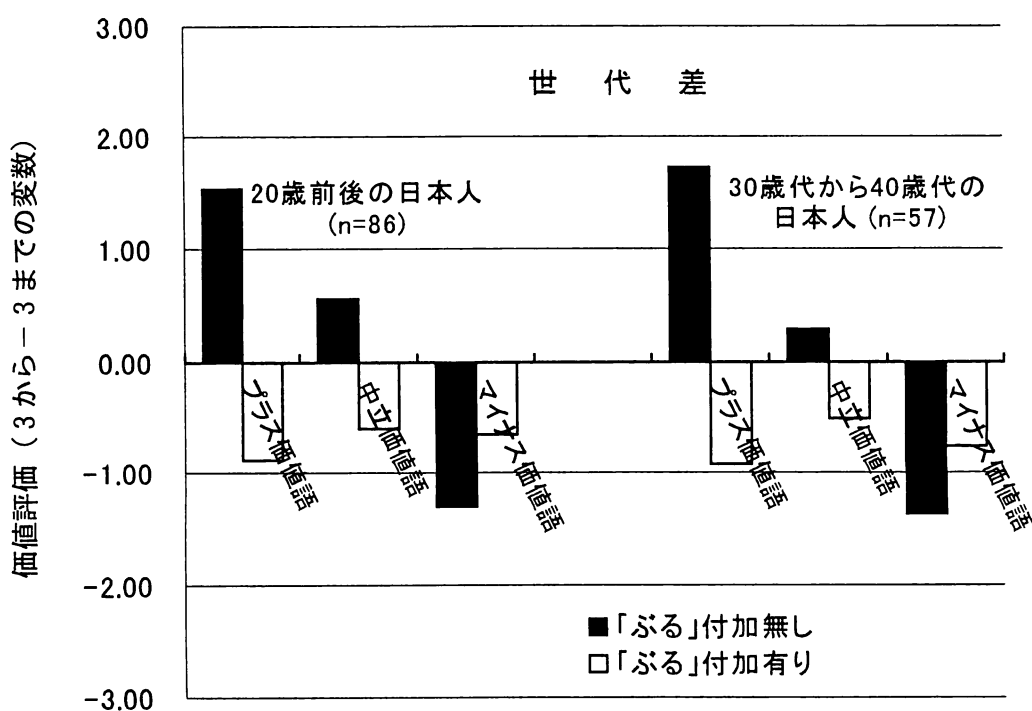


図1 接尾辞「ぶる」付加の有無による価値評価の変化

2つ目の興味深い結果は、「ぶる」の付加によって価値評価が一様化して収束することである。表1に示した「ぶる」が付加された場合の世代別の平均から、すべての平均値が、-0.51から-0.92までのわずか0.41の間に収束していることが分かる。具体的には、若い世代の場合、プラス価値語が平均で-0.88へ、中立価値語が平均で-0.60へ、マイナス価値語が平均で-0.65へと、ほぼ同じ価値評価に収束している。また、年長の世代の場合でも、プラス価値語が平均で-0.92へ、中立価値語が平均で-0.51へ、マイナス価値語が平均で0.76へと、若い世代と同じように振れている。これは、黄(2001)が主張する、「ぶる」付加によって語基の価値評価が逆転するという「振り子」のような転換機能ではなく、どのような価値評価を持つ単語であっても、「ぶる」付加によって、若干マイナスの中間的な価値評価へと収束するという現象を示している。

仮に、「ぶる」を付加することで、もともとの単語の価値が、その価値を基準として、正から負へあるいは負から正へと転換するのであれば(例えば、もともとの単語の価値評価が1.5であれば「ぶる」付加で-1.5へ、もともとの単語が-1.2であれば、1.2へ)、完全な逆相関となるので、相関係数が-1になるはずである。あるいは、価値の転換に多少の違いがあっても、かなり高い逆相関を示すはずである。そこで、「ぶる」付加の有無による価値評価の相関をピアソンの相関係数で調べてみた。すると、86名からなる若い世代でも(n=30, $r=0.16$, *n.s.*), また57名からなる年長の世代(n=30, $r=-0.21$, *n.s.*)でも、有意な相関は得られなかった。これは、「ぶる」を付加したところで、もともとの単語の価値と完全に逆転した意味にはならないことを示している。実際、「ぶる」付加の有無で単語の価値評価をプロットしてみると、図2のようになる。「ぶる」の付加が無い条件での価値評価を示すY軸について価値評価が大きく広がっているのに対して、「ぶる」を付

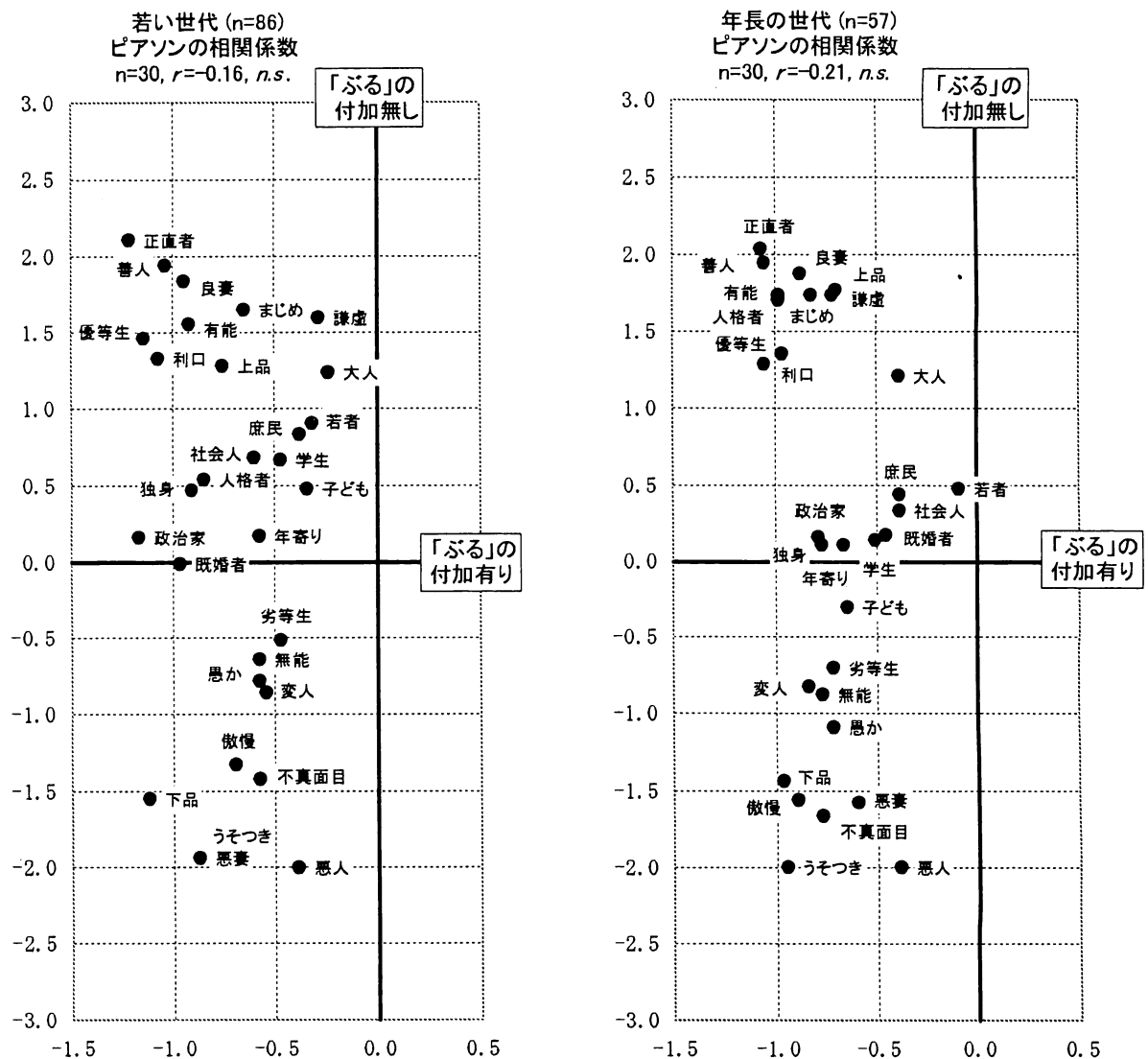


図2 「ぶる」付加の有無による単語の価値評価のプロット

加した条件の価値評価を示すX軸では、その広がりが極めて小さいことが分かる。この傾向は、若い世代でも年長の世代でも同じである。つまり、全体としてみると、「ぶる」を付加することで、単語の価値評価が収束する傾向があるといえよう。

4. 調査2 – 基準を設定して「ぶる」を付加した場合の価値評価の測定

被験者 調査1と同様に、世代の異なる2つのグループから116名の被験者を選んだ。若い世代は、日本語を母語とする大学生57名(女性5名, 男性52名)で、彼らの平均年齢は、18歳10カ月(標準偏差が7カ月)であった。最も若い学生が17歳8カ月で最も年齢の高い学生が20歳0カ月である。また、年長の世代は、30歳代から40歳代の59名(女性28名, 男性31名)である。彼等の平均年齢は、36歳7カ月(標準偏差が5歳1カ月)であった。年長の世代で最も若い者が30歳2カ月で、最も年齢が高い者が46歳11カ月であった。

質問紙 調査1では、基準を設定しないで価値評価の異なる単語に「ぶる」を付加し、価値評価の変化を測定した。しかし、「彼女は良妻ぶっている。」と表現した場合に、この彼女がどういう人間なのかは示されていない。そこで、彼女の基準を設定してから、「ぶ

る」を付加した文を作成した。例えば、「彼女は悪妻なのに良妻ぶっている。」と表現して、彼女を「悪妻」として基準を定め、「良妻ぶる」彼女の価値評価を聞く質問とした。彼女の印象については、調査1と同様に、「とても良い」の+3、「よい」の+2、「やや良い」の+1、「普通」の0、「やや悪い」の-1、「悪い」の-2そして「とても悪い」の-3までの7つの連続尺度で評定してもらった。

表2 基準語を指定した場合の「ぶる」付加による価値評価の変化

マイナス価値語を基準として、プラス価値語に「ぶる」を付加した例文(負→正の例)	意味的に対立する単語のペア	20歳前後(n=57)		30歳代から40歳代(n=59)	
		文中での基準語と「ぶる」付加語の価値評価の方向			
		負→正	正→負	負→正	正→負
彼女は悪人なのに善人ぶっている。	悪人⇔善人	-1.54	0.07	-2.00	-0.32
彼女は悪妻なのに良妻ぶっている。	悪妻⇔良妻	-1.67	-0.35	-1.39	-0.14
彼女は劣等生なのに優等生ぶっている。	劣等生⇔優等生	-0.82	-0.21	-1.12	-0.29
彼女はうそつきなのに正直者ぶっている。	うそつき⇔正直者	-1.56	0.07	-1.78	-0.64
彼女は下品なのに上品ぶっている。	下品⇔上品	-0.84	-0.16	-1.25	-0.34
彼女は無能なのに有能ぶっている。	無能⇔有能	-1.23	0.26	-1.19	-0.17
彼女は傲慢なのに謙虚ぶっている。	傲慢⇔謙虚	-0.51	-0.11	-1.29	-0.58
彼女は愚かなのに利口ぶっている。	愚か⇔利口	-0.95	0.05	-1.14	-0.17
彼女は不真面目なのに真面目ぶっている。	不真面目⇔真面目	-0.63	-0.09	-1.32	-0.42
	平均	-1.08	-0.05	-1.39	-0.34
	標準偏差	0.43	0.18	0.30	0.18

注：正→負の例は、ペアの単語が入れ替わり、「彼女は善人なのに悪人ぶっている。」となる。

刺激語 調査2の文を作成するためには、プラス価値語とマイナス価値語が一組になっている条件に限定する必要がある。そのため、調査1で使用した「良妻」と「悪妻」のように一組になったものから、表2に示したように9つのペアを選んだ。この方法であれば、基準の設定が正負の2種類となり、1つのペアから、「彼女は良妻なのに悪妻ぶっている。」のように正を基準として負の価値語に「ぶる」を付加する場合と、「彼女は悪妻なのに良妻ぶっている。」のように負を基準として正の価値語に「ぶる」を付加する場合と、2つの文を作ることができる。従って、9つのペアから18の文を作り、それらをランダムに配列して質問紙を作成した。なお、調査1で使用した「人格者」と「変人」の組み合わせは、「人格者」の評価が0.54で中間的な価値判断となったため除外した。

5. 調査2の分析と結果

調査2のために選択した9種類の単語のペアについて、基準を入れ換えて作成した18文の価値評価を、116名の日本語母語話者(若い世代が57名、年長の世代が59名)が判断した。各ペアの価値判断の結果は、表2に示した通りである。若い世代と年長の世代のそれぞれにつき、価値基準の方向が異なる2種類の文に対して、2(若い世代と年長世代)×2(「負から正」および「正から負」)の分散分析で検討した。反復測定の変数は、正と負の価値の方向である。調査1と同様に、分析は単語の刺激項目について行っている。平均および標準偏差は図3のグラフで示した。

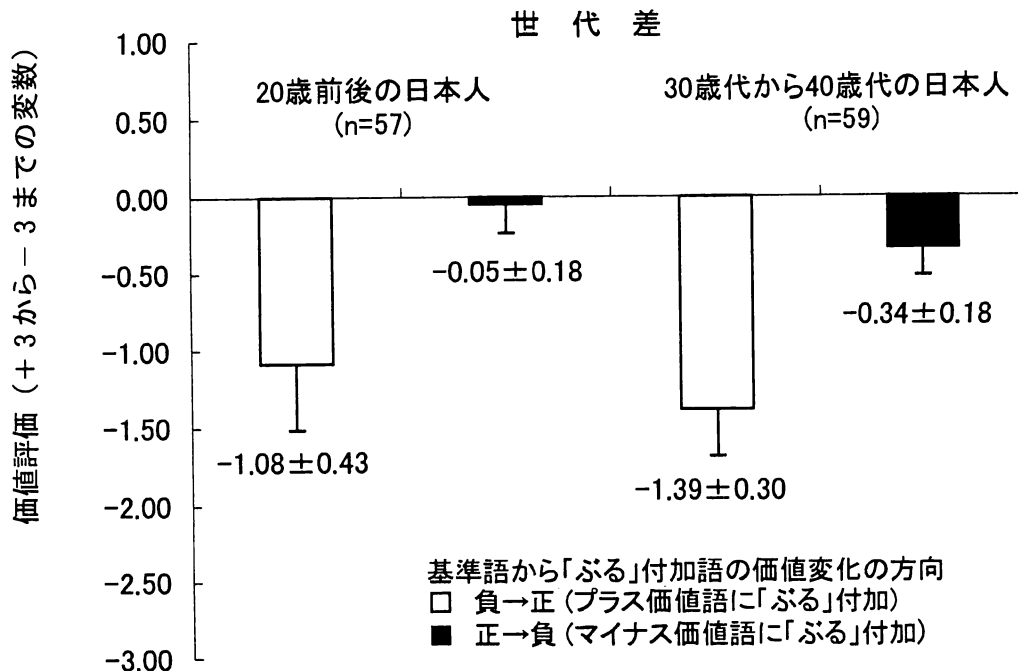


図3 基準語を指定した場合の「ぶる」付加による価値評価の変化
注：数値は価値評価の平均，±の後の数値は標準偏差を示す。

分析の結果，正と負の価値基準の方向 [$F(1,16) = 120.80, p < .0001$] および世代 [$F(1,16) = 8.67, p < .01$] の両変数に有意な主効果がみられた。しかし，両変数の交互作用は有意ではなかった [$F(1,16) = 0.04, n.s.$]。この結果を，図3を見ながら考えると，基準語を負に設定して正の単語に「ぶる」を付加した場合（即ち，「負→正」）は，マイナスの評価となる。しかし，基準語を正に設定して負の単語に「ぶる」を付加した場合（即ち，「正→負」）には，調査1と同じように若干マイナスであるがほぼ中間的な価値評価となることが分かる。例を挙げて考えると，「彼女は悪妻なのに良妻ぶっている。」という負の「悪妻」という基準語から正の単語に「ぶる」を付加して「良妻ぶっている」とした場合には，価値評価が強くマイナスになる。つまり，ほんとうは悪妻のくせに良妻のふりをしているという解釈から，強くマイナスの評価となるのであろう。しかし，方向を逆にして正から負の場合の「彼女は良妻なのに悪妻ぶっている。」とすると，ほんとうは良妻で素晴らしい女性なのだが，悪妻のふりをしているだけなのだ，という解釈になり，この彼女に対する価値評価は，若干マイナスではあるがほぼ中間的な価値評価となるのだと考えられる。こうした正と負の価値評価は，両変数に有意な交互作用が見られなかったこと（平均を示した図2を参照）から，若い世代でも年長の世代でも同じ傾向を示していることが分かる。しかし，世代の主効果が有意であることから，「ぶる」を付加した場合に，年長の世代の方が，プラス価値語であれマイナス価値語であれ，若い世代よりもより強くマイナスの評価を下す傾向があることも分かった。

6. まとめ－「ぶる」付加による価値評価の転換と収束

本研究は，「ぶる」付加による価値評価の変化を考察した。その結果は，以下の4点に

要約できよう。

第1に、森田(1989, 1996)や黄(2001)の転換規則は、プラス価値語に「ぶる」を付加した場合に当てはまる。また、その転換の振れ幅は、基準を設定した場合に顕著である。例を挙げて説明すると、「良妻」というプラス価値語に「ぶる」を付加して、「良妻ぶる」とした場合には、プラス評価が大きく振れて若干マイナスの評価となる。さらに、「彼女は悪妻なのに良妻ぶっている。」というように、「悪妻」という基準を設定すると、価値の転換がさらに顕著に見られる。つまり、基準の有無に拘わらず、プラス価値語に「ぶる」を付加した場合には、価値転換規則を支持する結果であった。

第2に、マイナス価値語に「ぶる」を付加した場合には、価値が転換してしまうほどの強い変化は起こらない。つまり、「悪妻」に「ぶる」を付加して「悪妻ぶる」としても、マイナス評価がプラス評価に転換して、「良妻」と同じ価値評価になるわけではなく、ややマイナス評価傾向の中間的な価値となった。「彼女は良妻なのに、悪妻ぶっている。」として、基準を設定しても価値転換は起こらなかった。従って、基準の有無に拘わらず、マイナス価値語に「ぶる」を付加しても、価値転換は起こらないという結論になる。

第3に、プラス・中立・マイナス価値語に「ぶる」を付加した場合をすべて考慮して考えると、基準を設けない場合には、いかなる単語でも、ややマイナス寄りの中間的価値評価へと収束するということが分かった。マイナス価値語の「悪妻」、中立価値語の「学生」、プラス価値語の「良妻」のどの単語に「ぶる」をつけても、ややマイナス寄りの中間的な価値評価へと収束した。つまり、基準を設定していない場合は、もともとの単語の価値に関係なく、いかなる単語（例えば、「悪妻ぶる」、「学生ぶる」、「良妻ぶる」）も同じような価値評価となる。

第4に、世代の違いの影響が見られるのは、基準を設定して「ぶる」を付加した場合で、年長の世代の方が若い世代よりも強く価値評価を変化させる傾向があった。それでも、プラス価値語に「ぶる」を付加した場合の大きな転換、またマイナス価値語に「ぶる」を付加した場合の収束の傾向は同じであった。基準を設定しないで「ぶる」を付加した単語の価値評価を要求した場合には、世代の違いはほとんど見られなかった。

以上のように、本研究では、「ぶる」付加による価値変化が転換規則に従うと言うほど単純なものではないことを実証した。確かに、プラス価値語に「ぶる」が付加されると、マイナス評価へと価値転換が起こる。しかし、マイナス価値語の「悪妻」に「ぶる」が付加されると、「悪妻ぶる」妻は、「悪妻」でも「良妻」でもない中間的な価値評価へと変わっていく。本当は「良妻」なのだろうが、「悪妻ぶって」いる妻は、決して悪くはなく、また良いという評価でもない。また、本当は「悪妻」なのであろうが、「良妻ぶって」見せる妻は、やはりけなげな妻なのであり、「悪妻」ではなく、しかし「良妻」とも成り得ない中間的な価値評価へと落ち着くことになる。また、「ぶる」は中立的な価値の単語にも付加され、その価値評価もやはり中間的な価値に落ち着く。全体で考えると、接尾辞「ぶる」は、このように語彙を中立的な価値評価へと収束させる性質をもっているようである。しかし、「彼女は悪妻なのに良妻ぶっている。」として基準を設定すると、明らかにプラスからマイナスへの大きな価値転換が起こる。ところがこの逆の「彼女は良妻なのに悪妻ぶっている。」とすると、基準が無い場合と同様に、中間的な価値評価へと収束する。このよ

うに「ぶる」付加による価値転換は、もともとの単語の価値および基準の設定によって微妙に異なっている。

謝辞：名古屋大学国際言語文化研究科の大曾美恵子先生，滝沢直宏先生，寺島啓子さんに，「ぶる」の表現検索にあたって，毎日新聞および『男はつらいよ・寅次郎』のコーパス検索のご指導をいただきましたので，ここに記して感謝を申し上げます。

引用文献

- (1) 黄其正 (2001) 『現代日本語の接尾辞についての研究』 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻博士論文 (D0725004)
- (2) 国立国語研究所 (1985) 『日本語教育指導参考書13 語彙の研究と教育 (下)』 大蔵省印刷局
- (3) 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
- (4) 森田良行 (1996) 『意味分析の方法－理論と実践』 ひつじ書房
- (5) 日本大辞典刊行会 (1981) 『日本国語大辞典(縮刷版)第九巻』 小学館

用例出典

石坂啓 (1993) 『赤ちゃんが来た』 朝日新聞社

(玉岡－広島大学留学生センター， 宮岡－広島経済大学， 黄－台湾真理大学)